



選考委員特別賞 那須正幹賞

駒音

徳島文理中学校 三年

西 将汰

「負けました」

敵のチームの大将が投了しました。

今、僕達は、中学校将棋団体戦西日本大会で、徳島県代表として戦っています。団体戦は、大将・副将・三将の三人で一チームをつくり、三人のうち二人が勝てば、チームとしての一勝です。

僕のチームは、大将の平田君、副将の僕、三将の利光君という構成です。特に、三将の利光君は、中学一年生ながら、徳島県大会では、全勝という成績を残しており、棋力は一級、僕達将棋部の期待のルーキーです。

さて、現在一回戦は、徳島県対大分県、大将戦、平田君の棒銀戦法が決まり、まずは一勝です。平田君は、昨年、将棋を始めたばかりなのに、グングン強くなって、棋力は二、三級くらいです。僕が、将棋部に入ってから、しばらくして入部し、初めて教えた弟のような存在であり、将棋に目覚めた今では、もう手強いライバルです。得意戦法は、棒銀と四間飛車です。

次は副将戦、これは僕の対局です。戦型は、角換わり腰掛け銀という現在流行の形となっています。今「四五歩」と仕かけて、局面は少し僕が優勢です。しかし、持ち時間はこちらが一分程少ないので、全体的に見ると互角でしょう。

将棋には、持ち時間という制度があって、それが全て無くなると、秒読みという「これからは、一手何秒で指さなければならぬ」という制度に切り換わるのです。また、将棋には、陣型を整える序盤、攻撃を始める中盤、そして遂に、敵の大将を捕えにかかる終盤とに分かれています。つまり、序盤、中盤、終盤をどんな時間配

分で指すか、持ち時間をどこで多く使うかという問題にぶつかります。例えば、ここが勝負所だと思えば、三分くらい考えこんで、深く、相手の手を予想してから指します。今回の大会は、持ち時間二十分秒読み三十秒という制度です。

僕は、将棋部中学部の部長です。といっても強いわけではなく、平田君にも利光君にも良く負けます。棋力は初段くらいです。得意戦法は三間飛車と袖飛車で、今回の角換わり腰掛け銀は仕方なくそうなったのです。つまり、あんまり指したくはなかったのですが、負けられないのです。

こちらは三将戦、利光君が居飛車で、相手が四間飛車です。今、お互いに攻撃し合って終盤の始め、かなり利光君が劣勢です。実は、利光君の得意戦法は、三七銀戦法、序盤の指し回しがすばらしいのです。僕は、利光君と戦うと、いつも序盤で苦しめられます。ほどなくして利光君が投了しました。

副将戦はというと、終盤に入り緊張が高まります。僕

が「5六角成」と相手の飛車先に、次の一手として「8三金」を狙った手、これが決まれば相手の飛車を手に入れることができます。相手は一分ほど考えて「5三銀」飛車の逃げ道をつくりました。ここでお互いの持ち時間は、相手が十三分、僕が十分、局面は僕が優勢、現在こちらが攻めています。「4八飛車」と回って王手、「4四歩」、ここで僕は、勝負手「2三金」「同金」「同馬」「3二金」「同馬」「同玉」、そして僕は一呼吸おいて「2三金」で王手、「同玉」「4三飛車成」、僕は、勝ったと思いました。以下、「4四角」「3四金」「2二玉」「2三金」「3一玉」「3三角」「3二銀」「同飛車」「同金」で、九手詰と思っていたのです。しかし、相手が打ってきたのは「4四金」、どういふことだろう、一瞬分からず困ってしまいました。なぜなら、三五の銀がただで取れるからです。分ならず「3五竜」、ここで待ってましたといわんばかりに、すかさず「6四角」、高い駒音だけが響きました。なんと、これが、銀と竜の両取りです。負けるかもと冷や汗が出ました。こううまい手を指

されると、困ってしまって、何を指せばいいのか分かりません。持ち時間は敵八分、僕九分、五分考えて仕方なく「同竜」、しかし、後で考えると、両取りを無視して「6一竜」が良かった、平田君に言われて気がきました。

その後、必死の抵抗を続けました。ここで負けるわけにはいかない、走ってるわけでもないのに息が荒くなります。

「ハアー。」

体も揺れます。いっそ投げやりになってやろうか、そうも考えました。秒読みに入り、深く読めないまま、平凡な手ばかりしか打てません。何か、この局面を打開する一手はないのか、最後の一秒まで考えても思いつかない、非常に歯がゆいものです。

「負けました。」

「ありがとうございます。」

挨拶が終わっても僕は笑顔です。人にはムカつくと言われますが笑顔です。今日も笑顔です。本当は悔しいんです。強がってるんです。

今回の大会は、僕の中学生生活初めての全国大会でした。本当に楽しかったですし、残念でした。大会後、お弁当が配られましたが、食欲も出ず、あまりおいしいとは感じられませんでした。利光君もそうらしく、半分くらい残してしまいました。

将棋自体は良かったのです。それには満足しています。次は負けません。大分県の相手が打った「4四金」

「6四角」あの手はうまかったなあ、心から思います。大好きな将棋を今はただ指し続けたいのです。